

# 難聴幼児と養育者の かかわりにくさ

小林隆児

東海大学健康科学部  
迫江のんびりクリニック

はじめに

今日第三者には見えにくい障得について積極的に取り上げられるようになってきた。難聴もそのひとつである。難聴という障得が当事者にとつてどのようなハンディキャップをもたらしているのか、比較的身近な障得であるにもかかわらず、われわれも意外なほどにわかつていない。

三重苦のヘレン・ケラーが、盲と聾のどちらかを選べといわれたら、と聞かれた際に、盲下に盲目を選ぶと答えた有名な逸話があるが、それほどまでに難聴が当事者にとつて深刻な障得であるのは、対人関係の成立に欠くことのできない言語の発達に深く関係しているからなのである。生来的、あるいは乳幼

児期早期の段階で難聴という障得を負っていることは、対人関係の成立の基盤づくりに深刻な困難をもたらし、そのことが人間としてのこのころの生涯発達全般に影響を及ぼす。最近になって、その深刻な問題の解明とそれに向けた援助の取り組みが試みられるようになってきている。

今日、高度な技術開発によって聴覚検査の手法は進歩を遂げ、乳幼児期早期に生得的な聴覚障得の多くが発見され、早い段階でその治療や指導が開始されている。そのため、筆者ら児童精神科医が難聴を有する子どもたちに直接関与する機会は比較的稀である。

筆者らの臨床の場であるMIU (Mother-Infant Unit) では、これまで乳幼児期早期で

のコミュニケーションにさまざまな問題をする親子の事例に対して、関係発達支援を試みてきた。その多くは広汎性発達障得 (PDD) の事例であるが、難聴幼児の事例も少なからず経験してきた。

そこで本稿では、難聴幼児とその養育者の間に生まれるかかわりにくさには、どのような問題が潜んでいるのか、その実態について具体的に検討してみよう。

なお、両者の関係の特徴を捉える際に、一つの枠組みとして、われわれはMIUで初回セッションの際に、新奇場面法 (SSP) を実施している (図1)。そこでは、愛着パターンの評価とともに、母子の分離と再会の際に認められる母子相互の微妙な反応のありように着目している。母子相互の反応を通して関係の内実を捉えられるのではないかとの期待からである。

## 事例呈示

A男 (二歳三ヵ月)

臨床診断：高度難聴、精神運動発達遅滞、反応性愛着障得 (非抑制型)。

新版K式発達検査：発達指数 (DQ) 四〇  
知的発達水準：中等度遅滞

主訴：コミュニケーションがとりづらい  
発達歴：胎生期、特に問題なかった。生後

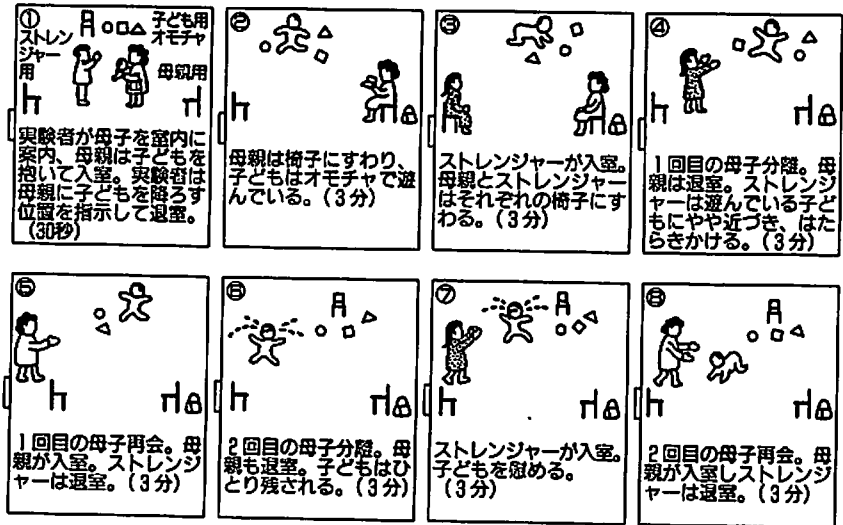


図1 新奇場面法  
 柏木恵子・古澤頼雄・宮下孝広「発達心理学への招待」62頁、ミネルヴァ書房、1986年

二カ月、母親は視線が合わないと感じていた。一〇カ月まで寝返りなど一人で身体の向きを変えることができなかった。もの静かなおとなしい子で、一人遊びが多かった。一歳過ぎても不活発なことばも出ないので心配だった。

新奇場面法

一歳五カ月、保健師に相談。一人遊びが多く、視線も合わない、耳が聴こえないのではと指摘された。某大病院耳鼻科での精査の結果、聴性脳幹反応(ABR)が認められないことから、高度難聴と診断された。さらに他の大病院小児科を受診し、PDDとも診断された。

同時期より、通園施設に通い始める。するとまもなく視線も合い、笑うようにもなった。名前を呼ぶと寄ってくる。しかし、いまだ食事は固形物がとれず、噛んだり飲み込んだりすることができない。食が細い。

SSP(丸数字は図1の数字に該当) ② A男の歩き方はぎこちなく、今にも願きそうな感じさえするほどで、全体的に動きもゆっくりしている。自分から母親に何かを求めることはない。黙々と一人で小さな半球形のスイカのミニチュアを手に取り、トランポリンの上に乗せて自分の手でトランポリンを叩き、スイカがリズム

カルに飛びはねるのを楽しんでる。この遊びをしばらく繰り返していると、母親もつきあって、トランポリンを叩くが、母親の叩き方が強すぎるのか、A男はうれしそうな反応を見せず、自分一人で続けている。それでも

なお母親が叩こうとすると嫌がるように反対側を向いて一人でやろうとする。

③ ストレンジャー(以後ST)が入室しても取り立てて目立った反応は見られない。トランポリンに母親が他の果物(モモ)を乗せて叩き始めるが、すぐにそれを取り上げ、自分でやろうとする。その果物は二つに割れるようにマグネットでくっついていたので、A男は自分でそれを切り離れたようなのだが、母親はそれに気づかない。A男は思うように切り離せないため、それを放り投げてしまう。そして少しぐずするような声を出したが、母親は「なぜ怒るの?」とA男に尋ねるだけで、A男の怒りの理由は理解できない様子である。見るからにA男は不機嫌になっている。母親は一所懸命になってA男に声をかけて、遊びに誘おうとしているが、母親の遊びには興味を示すことなく、ずっと一人で同じ遊びを繰り返している。楽しんでるというより、ことさらそれにしがみついているように見える。

④ 母親が退室しても、A男は目立った反応を見せない。しばらくしてスイカを持って滑り台に行く。滑り台の下のところへスイカを置いて、台を叩き始める。しかし、思うようにスイカは飛び跳ねてくれない。STが相手をし始めると、少し甘えたような声を出し始めるが、二人での遊びは楽しい方向には展開

しない。

⑤母親が入室。A男が滑り台のそばにいるのを見て母親はなんとか滑り台の階段まで連れてゆく。A男は滑り台を滑りたそうにしていないが、母親は滑り台の上からスイカを転がすように働きかける。A男は嫌そうな声を出し、乗ってこない。母親はどうして付き合ったらよいか、困惑気味でついに椅子に座って遠くから眺めるようになる。

⑥母親退室。一人きりになるが、特に目立った反応を見せない。しかし、それまで多少なりとも出ていた声はほとんど出なくなった。警戒心が強まっていることがうかがわれた。

⑦STが入って、すぐに相手をし始めると、嫌がることはなく、それまでになかったような甘えた喃語様の発声をさかんにするようになる。明らかに機嫌がよくなっている。STがそばでさりげなく他の遊びをして見せると、A男は興味を示し始め、じつと見続ける。ついには自分でもやりたくなって、やり始める。

⑧母親入室。すると、さきほどまで出ていた声は再び消えていく。母親が近づいて声をかけると、ことさら背を向けるようにして回避し、母親が連れて行こうとしたら嫌がっていた滑り台の階段のところに自分一人で行く。そして自分で階段を登ろうとするが、最初の階段に足をかけても、その後はうまく登

れない。母親はそばで見ているが、A男に手を添えて助けることもなく、ただことばかけをするだけである。さきほどSTがさりげなく見せた遊びを母親がやってみると、他の玩具を扱いながら、後ろ向きに母親のやっている様子を眺めるのだが、自分からそれをやるうとはしない。ことさらそれを避けている様子である。母親のそばでは、動きはぎこちないにもかかわらず、A男は一人で何でもやろうとし、母親に援助を求めたり、甘えたりする仕草をまったくといていいほど見せない。

#### まとめ

最も印象的なことは、A男の発達の遅れを考慮しても、A男の反応から比較的容易に彼のこのころの動きを感じ取ることができることである。しかし、子どもが少しでも成長してほしいという強い思いが焦りを生んでいるのか、母親は子どもこのころの動きを感じ取るゆとりはなく、自分の思いに沿った働きかけを懸命にしている姿が痛々しく映る。そのため、母親の働きかけはA男には侵襲的に映るのであろう。あからさまに回避的行動を取っている。一人ぼっちになると、警戒的な構えはよりいっそう強まっている。心細くても母親に頼ることもできず、懸命に一人で行動している姿が印象的である。こうした彼の心細い気持ちはSTと接する時に一時的には緩和されている。

B子 (三歳二ヵ月)

臨床診断・高度難聴 (二歳二ヵ月時、人工内耳装用)

津守稲毛式発達検査・DQ八二  
知的発達水準・境界域

主訴・言語訓練に乗ってこない。

発達歴・乳児期、夜泣きが激しかった。何か要求があるときは、激しく泣くばかりで何を訴えたいのか理解することが難しかった。

一歳過ぎた頃、激しく泣いていた時、ふとしたことから、B子がビデオを見たことから泣いていたことがわかり、それ以来、夜中にビデオを見せてやるようになった。ただ、その後もずっと夜泣きが激しく、コミュニケーションがなかなかとれず、音に対する反応も不確かだった。

生後四ヵ月の頃から保健師に相談をしていたが、はつきりせず、病院で中耳炎の治療を受けたこともあったが、一歳過ぎても難聴があることははっきりしないままだった。

一歳一〇ヵ月、祖父の病気の見舞いで実家に帰った時、大病院を受診し、そこで初めて難聴であることが判明した。その四ヵ月後、人工内耳の手術を受け、二歳八ヵ月から病院での言語訓練が始まるとともに、母親も家庭で訓練を開始した。

しかし、母親の働きかけにはなかなか乗らず、嫌がるが多かった。母親が一所懸命

に教えようとすればするほど、B子の拒否的態度は強まるばかりであった。母親は疲れてしまい、どうかかわればよいか困惑気味になっている。

B子はもともと活発で元氣良いが、神経質などころがあつて、クレヨンが指につくと気にしたり、小さなゴミを拾つたりすることがあるという。非常に頑固なところもあつて、泣き始めると一時間ぐらい続く。あやそうとするとますますひどくなる。自分の意思が通らないと激しく泣く。母親に急にまわりついてべたべたすることはあるが、母親にしつとり甘えることはない。ただただ泣いていることが多い。

### SUB

②母親は椅子に座つてB子の様子を見守つている。B子はテーブルの上にあつた玩具をひとつ(ミニカー)取り出し、母親の傍まで行き、母親の手を引いて遊びの相手をしてほしいとの意思表示をする。それからずっと母親はB子のそばで一緒につきあうが、B子のやつている遊びの様子をよく見て、ときおりことばを発することはあつても、それはB子の遊びに同調したもので、母親みずからB子を自分の遊びに誘い込もうとするようなものではない。声もおだやかで、B子にとつても侵入的な印象はなく、いつもB子の動きを見守り、付き合つている。そのため安心して見

ていられる雰囲気である。

③STが入室しても、母親はちよつと視線を向けて挨拶する程度で、過度に反応してSTに気遣う様子は見られず、ずっとそれまでと同じようにB子の遊びに付き合つている。母親はB子にSTへの挨拶を促すようなこともしない。まもなくして母親が椅子に座るために移動する。B子はすぐに母親の手を引いて、それまでと同じように遊びに付き合うように引つ張り込む。ただ、ずっとB子は発声することもなく、表情の変化もほとんどないのが印象に残る。

④母親が退室。B子は母親の退室にすぐに気づくが、顔色ひとつ変えず、遊び続ける。STが傍に寄つて遊びに付き合うが、特に拒否的・回避的な反応を見せることなく、STの接近や声かけにも目立つ反応を見せることはない。ずっと同じような調子で遊び続け、寂しそうな反応を見せることは一度もない。

⑤母親が入室するとすぐに気づいて、母親のほうにちらつと視線を向けてかすかに笑顔を見せる。母親がB子の傍に寄つてくると、B子もうれしそうな母親に近づくが、それ以上母親に甘えるような仕草を見せることはない。テーブルの上に乗っている鈴落としが欲しくて手を伸ばすが、届かない。すると母親のほうに視線を向けて、取つてほしいという合図を送る。母親も「これ(がほしいの)?」

と、すぐに呼応して取つてやる。鈴落としを自分でやり始めるが、うまくできなくなる。母親のほうに視線を向ける。母親はB子にどうしたらうまくできるか教えてやると、すぐにB子もそれに応じてうまく扱い始める。母親が「逆さにしてみたら」と促すと、すぐにそれをやってみるなど、母親のことばにもすぐに反応して応じている。母子のやりとりを見ていると、さほど母親はことばを用いることなく、交流は比較的円滑で、関係のこじれはさほど見られない。

玩具箱の中からソフトクリームを二つ取り出すと、母親が「ひとつちようだい」とB子に要求。するとB子はすぐに母親にひとつ手渡し、いっしょになって食べる真似を始める。母親が「おいしい?」と言いながら、ふたりで食べている。

⑥母親の退室を目で追い、すぐに「あー」と心細い声を発するが、すぐに消え、その後、声を出すことはほとんどない。ドアの傍に行くような後追いも見られない。じつと同じところに立ちつくしたまま、同じ玩具を手を持つていても、それに夢中になって遊びに興じることはない。しばらくすると、顔をゆがめ、心細い泣きそうな声を出す、それも弱々しく、すぐに消えてしまう。発声や表情に、B子の心細さ、寂しさなどの情動の変化はさほど強く表れないのが印象的である。

⑦ STが入室すると、少しほっとした雰囲気に変わる。遊びにもやっと動きが出て、滑り台のところに行ったり、シーソーに乗ってみようとするが、気持ちに乗らないのか、すぐに諦め、ひとつの遊びに気持ちが集中しない。STの手をとり、遊びに誘うが、すぐに手を離してしまう。STに向ける気持ちは判然としない。警戒的な態度を見せることもない。寂しそうな雰囲気も感じられるが、B子はほとんど表に出さず、我慢している様子である。

⑧ 母親が入室。すると、はっきりわかるようなうれしそうな表情をして、母親の傍に寄っていく。しかし、抱きつくような愛着行動はいっさい見られない。それでも母親の手を取り、それまで遊んでいた遊びに母親を誘い込もうとする意思表示をしつかり見せる。その後は、母子ふたり落ち着いた雰囲気遊び続ける。

#### まとめ

母親に対してとりわけ深刻なコミュニケーションの問題があるということではないが、母親が不在になってもSTがいる限り、どうにか我慢してさりげなく振る舞っている。しかし、STにはB子の緊張がひしひしと伝わってくる。一人になってしまうと、次第に不安と緊張が高まっていくのが手に取るようにわかり、ついには泣きそうになるのだが、そ

れでも発声はみられず、一人で黙々と遊んでいる。しかし、母親が入室してくると、初めにはつきりとしたうれしそうな顔を浮かべ、うれしそうな声まで出ている。

母親のかかわりがさほど侵入的でないためであろうか、B子の母親に対するアンビバレントな態度はさほど強いものではない。

#### C男(四歳〇カ月)

臨床診断…高度難聴(二歳一〇カ月時、人工内耳装用)。反応性愛着障害(非抑制型)。行動障害(自傷、攻撃的行動)。知的発達水準…軽度遅滞(推定)。

#### 主訴…自傷、衝動的行動

発達歴…生後四カ月の時、高度難聴と診断されている。母親は何とかことばが出るようにとの思いから、かなり早い頃からC男に厳しい訓練を課していたという。そのためか、一〜二歳の頃から、気に入らないことがあると、往來の真ん中でかんしゃくを起こしてひっくり返り、頭を路面に強くぶつけていたほどだという。突然、道に飛び出すこともあって目が離せない。奇声をあげることも多いという。

それでも二歳一〇カ月、人工内耳を装用するようになってからは、本児とかかわりやすくなり、それまでのような激しい自傷はみられなくなったという。しかし、玩具の刀や金

槌を手に取り、他人を叩いたり、突いたりすることが多く、目が離せない。

#### SSD

② C男の動きは活発で、周囲の玩具に関心を向け、何かと目に入る物を手当たり次第に扱い始める。一つひとつの玩具の扱い方は理にかなっている、扱い方はどこか荒っぽい。動きも激しく、どことなく落ち着きがない。

母子二人で遊んでいるが、C男は何でも一人でやろうとし、自分で思うようにならない時でも母親を求めない。自分一人のできるためというよりも、どこか無理して一人でやろうとしているように見える。過度に自立的に振る舞っている印象が強い。

何かを扱っている時に、ときおり母親のほうに顔を向けて自分のやっていることをわかってほしそうな仕草をするが、頻度は少ない。有意語はまったくなく、発声も乏しい。時に大きな声で「アー」と自分を訴え、注意や関心呼び寄せようとする。母親に自分を訴えるような発声は、STと一緒にいる時に比して明らかに少なく、C男は母親の前でどこか抑制的である。

#### ③ STが入ってきてても特に変化はない。

④ 母親が退室。母親が部屋を出て行く様子を眺めているが、まったく動く様子はない。STと一緒にそれまでと同じように動き回って遊んでいる。

⑤母親が戻ってくるが、特に接近することもなく、何事もなかったかのようにして遊びを続けている。

⑥母親が退室しようとする、C男は母親をじっと見ているが、すぐに接近することはない。それでも母親が部屋を出て行き、ドアが閉まると、途端にドアのそばまで小走りで寄っていく。しかし、発声はまったく見られない。ドアを自力で開けることができず、もうひとつのドアを開けようとするが、少し開いたにもかかわらず、すぐに諦める。まもなく動きが急に乏しくなって、両手に水鉄砲を持ちながらゆっくりと恐る恐る歩き、水鉄砲を周囲に向け、真剣な面持ちで周囲の様子をうかがっている。しばらくすると、トランポリンの端に腰かけて、元気なさそうにうつむいたままである。

⑦STが入室すると、途端に動きは活発になるとともに、大きな発声まで見られ、それまでの警戒心が急速に薄らいでいく。STにはまったく警戒する様子は見せない。

⑧母親が戻ってくるが、特に大きな変化はなく、母親のほうを見ることはあっても接近して甘えるようなことはなく、それまでと同じようにブロックを一人でどんどん持ち上げて何かを作ろうとしている。母親に訴えかける様子もなく、遊びに誘い込もうとするようなこともない。

#### まとめ

母親への愛着行動はまったく見られない。しかし、一人きりになると、明らかに心細くなって警戒的な構えを見せる。ただ不安を訴えかけるような積極的行動は見られない。過度に自立的で何でも一人で遊ぼうとしているが、楽しんでいようには見えぬ、何かをしなればというように何かに突き動かされるようになっている。動き回っているようにみえる。玩具を扱い始めてもすぐに他のものに移ってしまうし、玩具の扱い方も乱暴な印象を受ける。

母親は自分からC男の動きに沿った応答は少なく、子どもが懸命になって重そうなブロックを一人で抱きかかえながら運んでいても、すぐに手を差し伸べて支えてやろうとするような自然な動きは認められない。

STとふたりの時よりも、母親とふたりの時のほうがどこか緊張が高まり、発声も乏しい。玩具を扱いながら、ときおり注目してほしそうに大人のほうに視線を向けるが、それはSTと一緒にいる時のほうが母親といえる時よりも圧倒的に多い。

愛着の問題が中心にあるが、幼児期早期からの虐待ともいえるほどの厳しい養育が大きく関与しているように思われる。母親に対しておびえが強くアンビパレントで、心細いにもかかわらず、母親に愛着行動をとれない。母親はC男に対して過度に自立を要求するよ

うなしつかけを日頃から行っていることが推察される。

#### D男(四歳三ヵ月)

臨床診断：高度難聴(二歳一ヵ月時、人工内耳装用)

知的発達水準：軽度遅滞(推定)

主訴：ことばが出ない

発達歴：一歳前から母親はどこことなくこの子は聞こえが悪いのではないかと気になってはいた。一歳五ヵ月、某病院耳鼻科でABRを受けて初めて、高度難聴と診断された。病院での治療やことばの教室で訓練を受けてきたが、教室の先生から関係がなかなかうまくとれないと言われ、筆者を紹介されて受診。

#### SUSL

②D男はMIUの部屋に入るとすぐに、置かれている玩具に次々に目がいき、いろいろと扱うが、どれも長続きしない。そんな中でクルクルスロープに興味を示し、手にとりて扱い始める。すると、母親はD男がどのように遊び始めるか、様子を窺うこともなく、すぐに自分の思うように扱い、D男には自分のやり方で誘い始める。D男がどこなくミニカーを手にしてしまうと、すぐに母親のほうから声をかけて自分のペースに巻き込もうとする。D男はまったく声を出すことも母親のほうに視線を向けることもなく、かといって嫌

がる様子もなく、黙々と母親のそばで玩具を扱っているが、D男が自分のやりたいようにすると、「それは（大きいからクルクルスロップには）乗らない、違うって！」とすぐに母親は自分が良いと思うようなやり方をD男に指示している。母子は一緒に遊んでいるというよりも、母親の思い通りにD男を誘い込んでしまっている。こうして、母親は矢継ぎ早にD男に強い調子で声をかけている。それに対してD男はあからさまに嫌がることはなく、ただ黙々と玩具のほうに視線を送りながら遊んでいる。その姿は痛々しい感じがするほどである。

③ STが入室して挨拶すると、母親はSTに気遣う態度を見せながら、椅子に座る。すると、D男はSTを見るなり、恥ずかしそうな態度を見せ、母親のうしろに隠れるような仕草を見せる。しかし、母親はそうしたD男の仕草を見ると、なぜかすぐに椅子から立ち上がり、自分のほうから玩具のほうに行つて、D男を遊びに誘い始める。D男は母親の誘う遊びには乗ってこない。D男が他の玩具を扱いそうになると、母親は強い調子で、「(さっきまで使っていた玩具を) きちんと片づけて！」と指示する。このようにしていつも母親はD男の遊びを先取りするようにして強い調子でことばかけを続けている。

D男が滑り台に行つてすべろうとすると、

滑り台の下に母親は自分で思いついたように玩具を置き、それにD男が注目するように促し始める。D男が自分に反応してくれないと、なんどもいらつくような声を出して誘っている。

④ 母親は退室する際に、「ちよつと待ってね」とD男に声をかけて部屋を出ようとする。D男はすぐに母親を後追いつし始めるが、母親はD男に何度か「待っててね」と強く念を押して部屋から出て行く。ここで初めてD男は大きな声を出して泣き始める。三〇秒ほど泣き続けていたが、STがなだめていると、少しづつ泣き声は弱まり、ときおり思い出したように泣くことはあつても、怒りや悲しみを強く表現することはない。

⑤ 母親が入室すると、母親に近づき抱っこをしてもらいたそうにしているが、母親はほんの瞬だけ抱き上げてはすぐに降ろし、D男が泣いている様子を困つたような顔をして見つめ、その後すぐに鞆からハンカチを取り出して、D男に渡す。泣き続けながらもD男はハンカチを手にとつて自分で顔を拭き始める。泣いているD男を見て、母親は「ごめん、ごめん」と謝りながらも、「さっき、待っててね、って言ったでしょ」とD男に諭すような口ぶりで語りかけている。さらに、鼻水が出ているのが気になったのか、今度は「お鼻、かむ？ お鼻、出る？」とD男に尋

ねながら、ティッシュペーパーを手渡し、D男に自分で鼻をかむように促す。鼻をかみ終えると、すぐに母親は「トランポリン、やろう」と再び新しい遊びに誘い始める。D男はそれには乗らず、自分で他の玩具を扱い始めると、「それは赤ちゃんが使ふものよ」とD男にやめるように指示する。すると、トランポリンに乗って飛び始めるが、まったく楽しそうではないにもかかわらず、母親はD男が跳んでいるのに合わせて、「ピョン、ピョン……」と声を発している。D男の気持ちは一向に盛り上がり、黙々と一人で遊んでいる。

⑥ 母親はさきほどと同じようにして「ちよつと出てくるからね」と言いながら部屋を出ようとするが、D男はすぐに後を追いつ始める。それでも母親は部屋から出て行くが、今度は先ほどよりもさらに強く泣き叫ぶ。

⑦ そのためすぐにSTが入室して、D男を抱き上げてあやし始める。それでもしばらく泣き続けているが、STに抱かれていられることに對して、拒否的態度は見せず、ずっと抱かれ続けている。次第に泣き声も弱まってくる。STに強い怒りや悲しみをぶつけるということはない。

⑧ 母親が再入室。母親を見るなり、泣きながら母親のほうに近づき、両手を広げて抱かれたがる。母親はちよつとD男を抱き上げようとするが、なぜかすぐに降ろして、バッグ

のほうに行つて、ハンカチを取り出してD男に手渡し、顔を拭くようにしむける。

まとめ

D男がどのようにして遊ぼうとしているのか、様子を見守ることができず、母親は自分のペースでD男に遊びを誘導している。そのためであろう、D男はまったく母親のほうに視線を送ることなく、黙々と玩具のほうに常に視線を落としながら、さほど楽しくなさそうにして玩具を扱っている。母親に扱い方を尋ねたり、母親に何かを要求するような仕草はまったく見られない。D男は母親と一緒に過ごしている時には、まったく声を発しないが、母親と分離する際には強く泣き始め、心細さを訴えている。しかし、母親はD男の心細い気持ちを受け止めることはむずかしく、抱っこをしてもすぐに下ろして、泣いているD男の顔が気になるのか、D男に自分で拭くようにハンカチやティッシュペーパーを手渡ししている。母親との分離で泣き続けているD男に対して、説得を試みたり、我慢するようにしむけている。D男に対して自立志向の強い接し方をしているのが印象的である。

### 離職幼児と養育者の間に みられる関係障碍の諸相

今回取り上げた四例はすべてわれわれの臨

床の立場からの助言ないしは支援を求めて紹介されたものである。程度の差はあれ、発達遅れも認められる。それゆえ、この四例は離職児全体の中ではかなりバイアスがかかっている可能性が強いかもしれない。その点を考慮しつつ、四例を通して捉えられた関係障碍の諸相について論じてみることにしよう。

#### 子ども―養育者間の不良な情動調律

最初に驚かされるのは、子どもと養育者との間の情動調律が不良な例が多いことである。特にA男、C男、D男の三例でその点が顕著であった。とりわけC男の場合は虐待事例であることもわかつている。B子でも、養育者の焦燥感も手伝ってその言語指導がB子に回避的・拒否的反応を引き起こさせている。

#### 自分の気持ちを表に出すことが難しい

離職という障碍がコミュニケーションの発達において深刻な困難をもたらしていることは想像に難くないが、この四例においても話しことばを獲得できないことも手伝って、養育者に対して自分の気持ちを表に出すことが容易ではない。しかし、それは単に話しことばを用いることができないからではない。心細さ、寂しさ、悲しみ、怒りなどの素朴な感情を直接わかりやすく養育者に表現することさえ難しい。そのことが両者の関係の成立

を妨げているひとつの要因ともなっている。

#### 話しことばによる働きかけ

子どもには侵入的に映る

話しことばでの積極的な働きかけがB子を除いた三例で一際目につく。このような話しことばによる働きかけで気をつけなくてはならないことは、ことばの意味的側面は子どもに届かないにもかかわらず、ことばの情動的側面、つまりはことばのもつ力動感（*emotional force*）が子どもに直接的に敏感に感じられていることである。それは子どもたちにとって非常に侵入的な色彩を帯びるため、彼らの不安をよりいっそう強めていくことになる。

#### 話しことばの世界に誘い込まれることの恐怖

話しことばを積極的に教えていくということは、子どもを話しことばの世界に誘い込むことを意味している。それは子どもたち独自の世界が失われることにつながっていく。子どもたちにとっては大変に恐ろしいことである。それゆえ、回避的あるいは拒否的な構えをとって、極力それに巻き込まれないような行動を取ろうとするのはある意味では、至極当然の反応と旨つてもよい。

#### 子どもに過度な自立を促す傾向が強い

さらに、話しことば中心の働きかけは、子



どもに話しことばによるコミュニケーション世界でのかわり合いを求めることになるが、それは必然的に子どもに自立的な振る舞いを求めることになる。四例すべてにおいて程度の差はあれその傾向が認められている。

#### 子どもに見られる関係欲求の強さとアンビバレンス

子どもたちすべてにおいて、養育者のそばではさほど積極的に関係をもちつことはないが、いざ養育者との分離を余儀なくされると、とても心細くなっていることが示されている。しかし、いかに心細くても養育者に対して直接的に愛着行動をとることはきわめて乏しいのである。養育者に構ってもらいたい、かかわってもらいたいという関係欲求が内面で強まっているにもかかわらず、それが直接行動に反映されない。PDDと同様、養育者に対する関係欲求をめぐるアンビバレンスの心性を認めることができる。

#### 関係障碍の悪循環

以上述べてきた関係障碍の諸相から、両者の間には悪循環が生まれていることがわかる。その結果、いつまでも愛着関係が育まれていかない。両者の関係は常に葛藤的になる。安心感が生まれず、不安が持続していくと、養育者による話しことばを中心とした働

きかけは、そのもつ力動感の侵入性によって、子どもの不安をよりいっそう増強する。養育者はよかれと思って働きかけると、子どもが回避反応を示す。すると養育者は焦燥感も手伝ってよりいっそう強く子どもに働きかける。すると子どもにさらに回避的行動を誘発する。

こうして悪循環に拍車がかかっていくのである。

#### 関係障碍をもたらす要因

四例すべてに認められる子ども・養育者双方のかかわりにくさをわれわれは関係障碍として捉えて支援を實踐しているが、離障幼児とその養育者の間にみられる関係障碍をもたらす要因を考えると、これまで筆者らが主に報告してきたPDD群<sup>(5)</sup>と比較する時、大きな相違点があることに気づかされる。

おそらく子ども自身に生得的な「知覚—情動」過敏があることは確かであろうが、養育者側の要因がかなりのウェイトを占めていることがうかがわれる。C男のような虐待事例は極端な例であるとしても、多くの事例で話しことばを主体とした働きかけが非常に強いことである。そのことが子どもたちにとって侵入的に映り、養育者への関係欲求に対するアンビバレンスを強める結果をもたらしているのである。

#### 原初段階のコミュニケーションづくりの大切さ

離障児への言語指導についてはこれまで紆余曲折を経て今日に至っている。口話法中心か、手話中心か、いまだにその混乱が尾を引いているようにみえる。人工内耳の使用が急速に広がっている今日、その混乱は再び強まりつつあるのかもしれない。

筆者は離障児に対する言語指導に直接かかわった経験をもたないで、このことについて私見を述べる資格をもたないが、いかなる立場に立とうと、ことばの発達を考える際に、最も重視しなければならぬのは、原初段階でのコミュニケーションづくりである。

原初段階でのコミュニケーション世界のかかわり合いの最も重要な側面は、子どもの情動面への良好な調律でのかかわり合いである。子どもの気持ちの動きにわれわれが同調しながら応答し、それにことばを添えてかわるという関係を蓄積することの大切さである。

原初段階でのコミュニケーションにおいては、子どもの気持ち（情動）の動きが声の変化となって反映し、それがわれわれの情動の変化を引き起こし、相互の間で情動の共鳴が生じる。共感の原初のかたちである。このよ

うな関係が生まれるためには、子どもの情動が自由に伸びやかに機能するようにならなければならない。子どもがわれわれとの関係の中で伸び伸びと振る舞い、積極的に自分を押し出すようになることである。

そのための絶対条件は、養育者の存在が子どもの安全基地として機能していくことである。そのことによつて初めて、子どもに安心感が生まれ、子どもは自分の気持ちを自由に押し出し、その気持ちの変化が声となつてわれわれの心にも響きやすくなる。こうして深まつていく原初段階でのコミュニケーションが話しことばによるコミュニケーションを育てる上での大切な基盤づくりとなる。

#### おわりに

以前筆者らは、人工内耳装用児と養育者に対する関係発達支援の経過を報告したことがある。その中でひととき印象深かったのは、支援の結果、原初段階でのコミュニケーションが深まつていったのであるが、周囲からの雑音による焦燥感も手伝つて再び養育者の話しことばによる働きかけが強まると、初期の関係障害が容易に再現してしまうことであつた。

しかし、偶然の子どもの熱発と養育者による看病が契機となつて両者の愛着関係が再び深まり、両者の関係は修復に向かつたのであ

る。難聴児にとつて話しことばがどのように響くのか、その侵入性の強さを改めて実感させられる体験であつた。

難聴幼児に対する言語指導の基本となる関係づくりにおいて、今回述べた事柄はコミュニケーションの基礎的問題であつて、ある意味では特段目新しいことではない。しかし、今日の育児環境や養育者が抱く不安や焦燥感などを考えると、そのことの重要性は軽減するどころか、今後よりいっそう大切になるのではないかと危惧されるのである。

今回の事例検討を通して痛感したことは、難聴児に対する言語指導において、ややもすると話しことばを語りかけることに力点が置かれやすいのではないかということである。話しことばの獲得が大切であることに異論はないが、昨今手話を通じた身体あるいは情動レベルに重点を置いた交流の大切さが強調されるようになってきたのも、これまでの難聴児への言語指導にそうした傾向が少なかつたこととの反映かもしれない。

ただここで例示したように、人工内耳の技術開発が急速に進展していくなかで、難聴児に対する言語指導は大きな曲がり角に來ていることも事実である。今後、乳幼児期早期に人工内耳装用が一般化していくとするならば、難聴児に対するコミュニケーション指導も大きく様変わりしてくことになるであらう。

う。その時、コミュニケーション発達における聴覚の役割について、新たな知見が見出されるかもしれない。

本来であれば、ここに示した関係障害に対する支援を通して、両者の関係がどのように変容していくかについても論じる必要がある。しかし、すでに指定された紙幅を大幅に越えた。それは別の機会に改めて論じたい。

#### (文獻)

- (1) 河崎佳子「きこえない子の心・ことば・家族」明石書店、二〇〇四年
- (2) 小林隆児「自閉症の関係障害臨床」ミネルヴァ書房、二〇〇〇年
- (3) 小林隆児「自閉症とことばの成り立ち」ミネルヴァ書房、二〇〇四年
- (4) 小林隆児「主体性をはぐくむことの困難さと大切さ」『そだちの科学』五号、三五一―四一頁、二〇〇五年
- (5) 小林隆児「ストレンジ・シチュエーション法からみた幼児期自閉症の対人関係障害と関係発達支援」(数井みゆき・遠藤利彦編)『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房、印刷中
- (6) 小林隆児・船場久仁英・北野庸子「人工内耳を装用した幼児にみられる母子コミュニケーション」(小林隆児・缺岡峻編著)『自閉症の関係発達臨床』一〇〇―一二三頁、日本評論社、二〇〇五年
- (7) 村瀬嘉代子編『聴覚障害者の心理臨床』日本評論社、一九九九年